

2024年(令和6年)4月25日

病院長からの一言
コミュニケーション溢れる
職場を目指しましょう

弘前大学医学部
附属病院長 袴田 健一



4月から「医師の働き方改革」がスタートしました。課題の多い制度ではありますが、本来の目的は医師の長時間労働の回避と健康の維持です。すでに、勤務時間管理や労働時間制の変更などで多くのご協力をいただいているところですが、今後は安心・安全で質の高い医療を患者さんに提供することを前提として、皆さまと知恵を出し合い、適正な労働時間の短縮に取り組んでいきたいと思っております。一層のご協力をお願いします。

4月から病院執行部も新体制となりました。新たに総務担当副病院長として田坂定智教授に、病院長補佐として新設の勤務環境改善担当に漆館聡志教授、同じく新設の患者サービス向上担当に青木昌彦教授にそれぞれご就任いただきました。職員の声を業務改善や勤務環境改善に繋げるとともに、患者さんの声に耳を傾けてより良い病院を目指したいと思います。さらに、施設利用の共有化、全職種の研修環境の充実、国際交流の推進、新病棟整備計画への着手、遠隔医療センターの稼働、特定臨床研究の推進、特定行為看護師の研修制度の整備などの施策を、一歩一歩着実に進めてまいりたいと思っております。

さて、昨年後半から病床管理室が有効に稼働し、病棟利用が流動化しています。3月に新型コロナウイルス感染のクラスターが発生した際には、多くの病棟にご協力

いただいております。患者さんを分散させ、乗り切ることができました。一方で、病棟利用の流動化に起因して、診療のため病棟に訪れる医師と病棟スタッフの双方で声かけが不足しているとの声も聞かれます。最近、コミュニケーション不足による患者誤認事案の報告もありました。職員間の声かけを推進して、このような事態を回避したいものです。

ウィズ・コロナを迎えて1年となります。院内では十分な感染対策をとって弱者への感染リスクを低減させ、院外では制限なく自由に行動する生活スタイルが定着しつつあります。リスクをうまく制御しながら、職員間交流の機会を増やして、コミュニケーション豊かな職場環境を目指しましょう。

各診療科等の紹介 【薬剤部】

本南塘だより第113号発刊(令和6年4月)からちょうど80年前(昭和19年4月)、青森医学専門学校附属病院(現弘前大学医学部附属病院)に薬局が設置されました。当時、何名のスタッフで薬局が運営されていたか、手元で確認できる資料は残されておりませんが、現在、薬剤部(昭和37年4月に薬局から薬剤部へ改名)には、薬剤師が32名、薬剤助手が11名在籍しております(令和6年4月現在)。ここ30年の間に病院薬剤師の業務は急速な変化を遂げ、現在は、調剤(主に入院患者を対象)、抗がん剤調製、服薬指導、持参薬鑑別、医薬品情報収集、血中濃度モニタリング、治験支援等、多岐にわたっております。

一方で、近年、薬剤師の地域偏在・業態偏在が進み、青森県においては、特に病院薬剤師の確保が喫緊の課題となっております。当院も例外ではなく、マンパワー不足のため、手術室や入院支援センターに薬剤師を配置できず、タスクシフト/タスクシェアがもたらす働き方改革に十分に貢献できていないこと、大変申し訳なく思っております。我々はホームページを通じて、薬学生や既卒



の薬剤師を対象に、大学病院でファーマシューティカルケアを実践してみたいと考えている方を募っております(https://www.med.hirosaki-u.ac.jp/~pharmacy/)。

近年のAIの進化は目覚ましく、今後十数年で半数近い仕事がAIに置き換わるともいわれています。最近流行りのChatGPTに「病院薬剤師の業務でAIに置き換えることができるのは何ですか?」と入力してみると、「医薬品のデータ管理」、「薬物相互作用の警告」、「適切な投薬の支援」及び「薬剤師の教育とトレーニング」との回答がありました。確かに、これらの業務に最新機器を導入し、業務の効率化と確実性を高めることは極めて重要と考えられます。一方

で、薬物相互作用の強弱や服薬支援のレベルは個々の患者さんで大きく異なります。今回のChatGPTからの回答は、以下のように結ばれておりました。「特に患者とのコミュニケーションや個別の臨床判断など、人間の専門知識と判断力が必要な側面では、AIはサポートする役割を果たすに留まるでしょう。」次世代の病院薬剤業務として、我々は、薬物療法支援のオーダーメイド化を目指していきたいと考えております。

弘前大学医学部附属病院職員の皆さまにおかれましては、今後とも薬剤部に対しまして、ご指導ご鞭撻賜りますようお願い申し上げます。

(薬剤部 部長 新岡文典)

被ばく医療合同訓練を実施

令和5年12月7日に弘前大学医学部附属病院と日本原燃株式会社は、六ヶ所再処理工場において放射性物質を体内に取り込んだ可能性のある傷病者が発生したことを想定し、通報連絡および搬送、到着後の除染措置など、緊急被ばく医療合同訓練を実施しました。

本訓練は、弘前大学医学部附属病院と日本原燃株式会社は2007年10月16日に「放射性物質による被ばく・汚染を伴う傷病者の診療に関する覚書」を締結し、実際に汚染や内部被ばく等の

傷病者が発生した場合には受け入れることとなっております。訓練は今回で6回目となります。昨年度の訓練ではα核種の内部汚染という対応が難しい症例でしたが、今年度は救命センター受け入れ側でより多くの医師看護師が被ばく医療に対応できるようになることを目的として、もう一度基本的な汚染傷病者対応を確認しました。

訓練では、日本原燃から高度救命救急センターへ傷病者受入れ要請の通報から始まり、受入決定後に院内各所への報告及び人員派遣



傷病者治療の様子



訓練後の振り返り検討会

を要請します。続いて、医師・看護師等の汚染を防ぐ防護服の着用や、施設の床や物品の汚染を防ぐためにビニールシート養生保護などの受入準備を整えます。傷病者が到着してからは、救命措置を最優先にしながらも、汚染部位の除

染等を行い病棟入院までの手順を確認しました。今回事故現場では鼻スミアが陽性(鼻腔内をぬぐった綿棒で放射線が検出された)という設定で、内部被ばくも疑われる患者情報でしたが、来院後のスミアは鼻腔口腔とも陰性で、外傷と汚染のみの対応でした。最後に、傷病者治療エリアの放射線量を計測しながら養生の解除を行い、安全宣言を発して訓練終了となりました。訓練終了後の振り返り検討会においても、様々な課題を共有でき充実した訓練となりました。

当日は本学から約20名及び日本原燃から約10名が参加し実践的な訓練を行うことができました。今後も関係各所との連携強化も含め、様々な訓練を通しながら即座に行動できる体制づくりを進めて参ります。

(高度救命救急センター長 花田裕之)

令和6年度体制スタート!

今年度は、副病院長に呼吸器内科学講座 田坂定智教授、救急災害・総合診療医学講座 花田裕之教授、産科婦人科学講座 横山良仁教授が就任しました。また、病院長補佐に消化器血液免疫内科学講座 櫻庭裕丈教授、放射線診断学講座 掛田伸吾教授、脳神経外科学講座 齊藤敦志教授、輸血・再生医学講座 玉井佳子教授、形成外科学講座 漆館聡志教授、放射線治療学講座 青木昌彦教授、薬剤学講座 新岡文典教授、看護部 井瀧千恵子看護部長が就任しました。(総務課)



副病院長 田坂 定智 呼吸器内科学講座 教授
副病院長 花田 裕之 救急災害・総合診療医学講座 教授
副病院長 横山 良仁 産科婦人科学講座 教授
病院長補佐 櫻庭 裕丈 消化器血液免疫内科学講座 教授
病院長補佐 掛田 伸吾 放射線診断学講座 教授
病院長補佐 齊藤 敦志 脳神経外科学講座 教授
病院長補佐 玉井 佳子 輸血・再生医学講座 教授
病院長補佐 漆館 聡志 形成外科学講座 教授
病院長補佐 青木 昌彦 放射線治療学講座 教授
病院長補佐 新岡 文典 薬剤学講座 教授
病院長補佐 井瀧 千恵子 看護部 看護部長

南塘だより寄稿の機会をいただきありがとうございます。寄稿にあたり、「先憂後楽」の意味するところを考えてみました。人々よりも先に国のことを心配し、人々が楽しんで後で自身が楽しむべきという政治を行う者の心得を説く言葉で、中国の北宋の政治家である范仲淹が述べた言葉だそうです。苦労や苦難を経験したり、心配事をなくしたりしておけば、後で楽ができるという意味でも用いられています。日頃、病と闘う命に向き合う私たちが、今最も憂う

べきことは何か。それは命の尊さを全世界の人々と共に考えることではないでしょうか。ウクライナやパレスチナで起こっている争いでは、幼い子供たちを含む多くの尊い命がいとも簡単に失われています。多くの人命が一瞬にして奪われた東日本大震災から13年、2024年新年早々の能登半島地震で再び多くの尊い人命が奪われました。また、10代20代の若者が自ら命を絶つ報告が後を絶ちません。人命は大人も子供も同じように平等ですが、私たちが願う

先憂後楽

「今憂うこと」



病院長補佐 櫻庭裕丈

のは、それぞれに与えられた寿命を健康に全うすることです。私が尊敬するある先生の言葉で、ずっと心に残っている言葉があります。それが「親死ぬ子死ぬ孫死ぬ」です。もともとは禅師たちが表現した言葉で、大切な人を失うことは悲しいことだが、それが生まれた順番通りで年をとったものから死んでいくのであれば、自然なことでもむしろ一番めでたいことであるという意味です。これはまさに医学の目標につながる言葉だと思います。子を持つ親はもちろ

ん、若い人達が病気で命を失うことに直面する私たち医療者の心に強く響く言葉です。また、私の大好きなアーティストの曲に「命の別名」という歌があります。その中で「命に付く名前を【心】と呼ぶ、名もなき君にも、名もなき僕にも」と歌われています。医学は命に始まりそしてそれは心に始まることだと思います。命を大切にすることを育み、憎むべき病気と戦い続けるのが私たち医療者の使命であると考えております。

令和5年度東北ブロックDMAT 参集訓練

令和5年10月14日に東北ブロック DMAT 参集訓練に参加しました。この訓練は東北6県と新潟県のDMATが参加する訓練で、令和5年度は青森県全域で実施されました。今回は北海道ブロックからの参加もあり、青森 DMAT の26隊・143名を含む86隊・450名が参加しました。青森県東方沖を震源とする地震により津波被害を伴う大規模災害の想定で、本部運営、病院支援、傷病者診療、広域医療搬送等の実践的な訓練を実施しました。

弘前大学病院 DMAT は、地域の被災状況調査と DMAT の活動や病院支援を指揮する「津軽地域 DMAT 活動拠点本部」、病院に参集した DMAT や傷病者対応等を指揮する「弘前大学病院支援指揮所」、被災地外の医療機関に転送する搬送拠点を指揮する「青森空港 SCU (航空搬送拠点臨時医療施設) 指揮所」、県外から参集した DMAT の派遣先を指揮する「津軽サービスエリア DMAT 参

集拠点本部」の統括業務を行い、青森県 DMAT 調整本部と連携し、津軽地域の DMAT や傷病者のマネジメントを行いました。また医学部医学科の学生は傷病者役として参加いただき、災害医療を経験する良い機会になったと考えています。



津軽地域 DMAT 活動拠点本部



青森空港 SCU 指揮所



弘前大学病院支援指揮所



津軽サービスエリア DMAT 参集拠点本部

院内コンサートを開催 (12/20)

新型コロナウイルス感染症拡大により令和2年度から3年間中止していた院内コンサートですが、このたび入院患者さんに限定した「クリスマスコンサート」として令和5年12月20日に開催いたしました。

演奏は弘前大学医学部管弦楽団の皆さん、指揮は馬場正之先生(青森県立中央病院医療顧問)によるもので、演奏曲はクリスマスキャロル・メドレー(クリスマスおめでとう、真舟のなかに、ひいらぎ飾ろう、ディンドン空高く)から始まり、海の見える街、カントリー・ロード、くるみ割り人形よりマーチ、花のワルツ、最後にクリスマスキャロルメドレー(お誕生日おめでとう、さやかに星はきらめき、さいころコロコロ、ジングルベル、諸人ごぞりて)が演奏されました。会場となった中央待合ホールには約70人の入院患者さんが訪れ、管弦楽団ならではの豊かで優しい演奏に聴き入りながらクリスマス気分を



楽しんでいました。院内コンサートを再開するにあたり感染対策が課題でした。これについては感染制御センターに助言をいただき、観客は入院患者さんに限定し、客席は1人分空けて座っていただくこと、拍手のみとして声出しは行わないこと、演奏者と観客との間は2メートル以上空けること、演奏者には10日前からの健康観察を行っていただくこととしました。その結果、院内コンサートが原因と思われる感染症は確認されておらず安堵しております。今回のコンサートの開催にあたり、入院患者さんへの周知や付き添いなど看護部のご協力に感謝いたします。(医事課)

令和6年能登半島地震へのDMAT 派遣



能登医療圏 DMAT 活動拠点本部



珠洲市総合病院での医療支援



珠洲市総合病院での搬送支援

令和6年能登半島地震によりお亡くなりになられた方々に謹んでお悔やみ申し上げますとともに、被災された皆さまに心からお見舞い申し上げます。

青森県の DMAT には1月6日に第3次隊としての派遣要請がありました。DMAT は通常1隊5名で活動しますが、長距離移動を考慮し、2隊8名(医師:長谷川聖子・伊藤、看護師:上原子まどか・工藤良子、業務調整員:熊澤祐樹・加藤隆太郎・花田昌吾・辻口貴清)で出動しました。参集場所であった七尾市の能登総合病院への移動には13時間を要しました。その後、珠洲市の支援を要請されましたが、大雪で通行止めとなり、翌朝から移動となりました。七尾市から珠洲市への移動は、積雪によ

り道路の亀裂や段差がわからず、非常に気を遣う運転で、さらに支援車両による大渋滞で、150kmの移動に7時間弱を要しました。到着後に珠洲市総合病院の支援が決定しました。病院は水道以外のライフラインは復旧していましたが、貯水タンクの破損により、水の補充が追いつかない状態でした。主に診療と転院搬送の支援を行いました。被災から1週間が経過していたこともあり、外傷診療ではなく、避難所で蔓延する感染症(インフルエンザと新型コロナウイルス)と、持病悪化の対応が中心となりました。最近では医療機関が被災した場合に、可能な限り機能維持のための支援を行います。水道の早期復旧が望めないため、珠洲市においては、重症者は

避難せざるをえない状況でした。今回は志賀原子力発電所の被害が少なく、大事には至りませんでした。原子力災害時には、対応がどこまで可能だったかと課題が残りました。下北半島は能登半島と地理的にも原子力施設の観点からも類似点が多く、青森県での災害対応に関しても、再検討が必要があると思われます。

また1月17日から第6次隊の派遣要請があり、1隊3名の4隊で26日まで、珠洲市の支援を行いました。社会福祉施設の避難支援が主な活動でした。最後に能登半島の一日も早い復興をお祈りしております。

(災害・被災医療教育センター長 伊藤勝博)

能登半島地震への JRAT 派遣

令和6年1月15日から21日 JRAT 派遣にて石川県金沢市で活動を行いました。JRAT という組織は Japan Disaster Rehabilitation Assistance Team (日本災害リハビリテーション支援協会) の略であり、生活不活発病予防や避難所における住環境の評価、福祉用具の調整等を行い被災地の早期復興を支援する団体で、全都道府県にて地域 JRAT が組織化されております。青森 JRAT はリハビリテーション医学講座教授の津田英一が代表、私が事務局長となっております。

今回私は JRAT の初動スタッフとして、石川県立リハビリテーションセンター及びいしかわ総合スポーツセンター(スポセン)にて活動を行いました。石川県立リハビリテーションセンターには JRAT 石川本部があり、本部での人員調整や記録、物資調整等の活動を行いました。スポセンは1.5次避難所と呼ばれる避難所となっており、高齢者や要配慮者等



が2次避難所に移るまでの期間、滞在する目的で設置されておりました。能登半島では停電や断水が長期化していたため、私が滞在している間も毎日数十の方が能登半島よりスポセンへ搬送されておりました。当初は数日以内で2次避難所に移動する予定でしたが、2次避難所の受け入れが滞っており、1週間以上滞在している方も半数以上いました。その中で補装具を持参できなかった方への調整や、転倒予防のための靴の調整、歩行困難にならないようにするための集団体操、嚔下困難者への評価等様々な活動を行ってまいりました。また、筆者が滞在している時には全体で400名程(80%以上が高齢者)の避難者がいたもので、支援隊の振り分けや物資調達などの業務調整も行いました。それほど長期間の支援はできませんでしたが、石川県の皆さまへ少しでもお役に立てたのであれば幸いです。今後はこの活動を青森県内が被災した際に活用できるように活動報告書等の資料作成を行いたいと思います。今後も病院関係者の方にはお世話になることが多いと思いますが、JRAT 活動に関してご支援をいただけると幸いです。

(リハビリテーション部 療法士 西村信哉)

マネジメントセミナー

2024年1月19日に全国国立大学病院事務部長会議主催 令和5年度大学病院マネジメントセミナーが岐阜大学で開催されました。セミナーでは各国立大学病院における経営改善、業務改善、医療支援、その他の分野の様々な取組事例について、各大学から紹介されました。今回、本院における病院専門事務職員のキャリアパス設定への取組が発表事例として選出され、発表を行うことになりました。

本院の取組事例としては、大学本部採用ではなく、病院独自の採用枠を確保し、院内事務部のみでのキャリアパスを設定し、病院専門のジェネラリストを確保、育成していくという内容でした。実際のところは、令和5、6年度での採用を実施したというところ、人材確保の課題が解決したわけではなく、これから10年、20年先を見据えての計画がスタートしたという段階ですので、

今後への期待も含めての選出と考えております。

なお、本院を除き、各大学から全部で15の取組事例が紹介されましたが、増収のための対策やDX推進による業務改善、システム導入等による患者の利便性向上など、どの取組の内容も非常に参考になるものでした。加えて、各組織における様々な課題解決のための取組を成功させる上で大事なことは、アイデアや職員のスキル

もさることながら、どのように組織としてまとめて進めていくか、連携できる職員を集められるかというところであると感じました。取組に参加するスタッフとして、他課の職員を含めた横断的なチームを組んでいたり、必要に応じ職種垣根を越え、医師や医療スタッフと協働して実施できている取組はやはり大きな成果が出ていると感じました。

新型コロナウイルスによる大き



な波を乗り越えたところですが、病院として、大学として、本当にたくさんの課題が課せられています。この課題を一つ一つクリアし、さらに大きく発展していくために、職員みんなで取り組んでいきましょう。(総務課 宮崎龍平)

弘前大学医学部附属病院へのご寄附、心より御礼申し上げます

お名前のご掲載をご承諾いただいた方に限り、ここにご芳名を掲載させていただきます。今号では、令和5年11月から令和6年1月末までの間にご入金を確認させていただきました方を公表させていただきます。(経理調達課)

寄附者ご芳名

- 鈴木 秀和 様 ○藤田 一雄 様 ○対馬 壽夫 様 ○対馬 知徳 様
- 森山 裕三 様 ○黒江 清郎 様 ○渡辺 泰宏 様 ○奈良 清貴 様
- 銭谷 道子 様 匿名希望 10人

※掲載の同意をいただいた方以外は、匿名希望とさせていただきます。

【編集後記】

2月の暖かさに、今年の桜も例年になく早い咲きとなるのでは、と早い春の到来をわくわくしていたら、3月になった途端の寒の戻りで、桜の開花は例年よりは早いものの、去年よりは1週間程度先になるようです。しかし、10年連続でゴールデンウィーク前に桜が満開になることは間違いなく、弘前の観光のことを思えば、複雑な気持ちになります。コロナ禍で花見を自粛されていた部署も多かったと思います。地べたに仲間と車座になるのもよし、皆で桜の下をそぞろ歩きをするのもよし。働き方改革も4月から始まりました。ほうっと息を吐いて、肩の力を抜いて、桜を愛でてみませんか。お城の近くの大学病院で働く特権です。 (病院広報委員会委員 脳神経内科 富山誠彦)